

## 大切したい「言葉の力」

校長 大野 郁子

学校周辺の田んぼの稲も黄金色に変わり、実りの秋を迎えています。学校では、全校縦割りの「ふるさと遠足」や「北っ子フェスティバル」、持久走記録会など、学年を越えて関わり合う行事や自分の記録に向けて粘り強く取り組む行事があり、子どもたちの心の成長が期待される時期です。こうした活動の中で、大切にしたいのが「言葉の力」です。



大正末期から昭和の初期にかけて活躍した詩人 金子みすゞの詩に『こだまでしょうか』という作品があります。(下記参照) その中には、『遊ぼう』っていうと『遊ぼう』っていう「『ばか』っていうと『ばか』っていう」といった言葉のやりとりが描かれています。まるでこだまのように言葉は相手に届き、そして自分に返ってくる—そんな詩です。この詩のように、実際の場面でも、優しい言葉は、相手の心を優しくし、優しさとなって返ってきます。励ましの言葉は、相手を勇気づけ、前向きに取り組む力を自分にも与えます。逆に、冷たい言葉や乱暴な言葉は、冷たく乱暴な言葉となって自分や自分に関係する人に返ってくるかもしれません。

子どもたちには、「どんな言葉を使うか」が、自分自身や自分を取り巻く社会(学級、学校、家庭)に大きく影響していることを伝えたいと思います。友達を応援する言葉、失敗してしまった仲間に寄り添う言葉、周りを笑顔にする言葉、そして自分自身を奮い立たせる言葉—「言霊(ことだま)」という言葉があるように言葉には力があります。それを意識して、私たち教職員も、子どもたちの言葉に耳を傾け、心を通わせながら、共に歩んでまいります。

この秋、子どもたちの言葉が、互いの心をつなぎ、温かい学校づくりにつなげていきたいと願っています。保護者、地域の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

「こだまでしょうか」  
金子 みすゞ

「遊ぼう」「遊ぼう」  
「遊ぼう」。

「ばか」「ばか」  
「ばか」。

「もう遊ばなら」「遊ぼう」  
「遊ばなら」。

「ソウして、あつは  
さみしくなっつ」

「「めんね」「めんね」  
「めんね」「めんね」。

「こだまでしょうか、  
いいえ、誰でも。」